

I 研究について

1 情報モラル教育に関する学校の課題

児童生徒 1 人 1 台端末の整備や新型コロナウイルス感染対策によるオンライン授業などの GIGA スクール構想の推進、ChatGPT などの AI (人工知能) 技術の活用、デジタル庁の設立など、児童の身近な生活の中でもデジタル化が進められている。

本校においても一人一人にタブレット端末が整備され、ICT のベストミックスによる、個別最適化された学び、協働的な学び、探究的な学びを目指して「学びの変革」に取り組んでいる。

児童はタブレット端末を使った学習にとっても意欲的に取り組んでいる。機器操作スキルに優れ、学校だけでなく家庭でも多くの機会に端末に触れていることが伺える。家庭でも端末を使うルールを決めたり、インターネットにおける危険性を話し合ったりしている。

しかし、Society5.0 の時代を生きる子どもたちには、従来のルールを提示して守らせていく「抑制・他律・心情規範」の力を育成していくのではなく、デジタル化に順応し、目的や必要に応じて積極的に ICT を活用し、“自分事”として管理していくための「活用・自律・行動規範」の力を育成していく必要がある。

そこで本校では、ふくしま情報モラル診断や GIGA ワークブック等を活用した授業研究会を行い、全職員で成果や課題を共有し、各学年での実践を充実させることによって、自己マネジメントする力やリスクを回避する情報活用力を高めていきたい。

2 研究の概要

(1) 研究テーマ

「何がリスクなの？」情報モラル、メディアリテラシーの育成

研究テーマを設定するにあたり、これまでの情報モラル教育では、情報のリスクのみが強調されていたが、情報モラルとメディアリテラシーの両方を組み合わせながら育てていくことで、トラブルを防ぐ方法とトラブルがあった場合の対応などを総合的に学べるようにしていく。

また、先生方への聞き取りで、「情報モラル教育が大切なことは分かっているが、何をどのように実施してよいか分からない」という指導に対する不安の声が挙がった。15分から45分の間で指導時間に幅を持たせられる GIGA ワークブックを用いて、「これなら私でもできる」と自信を持って取り組める実践を重ねていく。

(2) 研究計画

本校では、今後の生活で生かすことのできる情報モラルとメディアリテラシーの両方の育成を目指し、授業実践を中心として研究を進めていく。また、児童だけでなく教職員、保護者についても同様に情報モラルやメディアリテラシーへの理解を深めていくために、外部講師による講演を行ったり、家庭教育学級を開くことによって教職員と保護者の共通理解を図ったりしていく。

校内研修においては、他校の先行実践や GIGA ワークブックの活用例を参考にしながら研究を進めていく。また、道徳科や特別活動だけでなく、各教科における情報モラル教育の実践を行うことで、教職員の情報モラル教育、メディアリテラシー教育の見識を広げ指導力の向上を図っていく。

(3) 年間計画

時 期	実 施 内 容
6月13日	青少年のインターネット利用環境実態アンケートの実施
6月16日	校内研修「実態調査及び結果・考察①」について
6月23日	家庭教育学級「メディアと“安全に”、“楽しく”つきあうために」
7月14日	「ふくしま情報モラル診断」第1回アンケート実施
7月20日	校内研修「GIGA ワークブック」活用について
7月24日	校内研修・南会津地区小教研第一次研修会全体講演会 「1人1台端末環境での情報活用能力としての情報モラル教育をどう進めるか」 講話：静岡大学教育学部学校教育講座 准教授 塩田 真吾 先生
7月31日	授業の魅力化オンライン研修会（情報モラル教育）
9月11日	校内授業研究会 第3・4学年 学級活動 「自分と相手との違いについて考え、インターネットの特性について知ろう」 指導助言：静岡大学教育学部学校教育講座 准教授 塩田 真吾 先生
11月6日	校内授業研究会 第6学年 社会科「江戸幕府と政治の安定」 指導助言：静岡大学教育学部学校教育講座 准教授 塩田 真吾 先生
11月10日	「ふくしま情報モラル診断」第2回アンケート実施
11月17日	校内研修「変容調査及び結果・考察②」について
11月24日	校内研修「実践のまとめ」について

Ⅱ 研究の実際について

1 校内での実践

保護者・教職員を対象とした家庭教育学級の実施（6月23日）

先に実施したメディア利用環境アンケートをもとに、児童から出た課題を家庭と共有するとともに、メディアとの正しい付き合い方について子どもと話し合ったり、確認したりする機会づくりの提案として、保護者と教職員を対象に家庭教育学級を実施した。

テーマ 「メディアと“安全に”、“楽しく”つきあうために」

1 高まるメディアの必要性

- ・新たな社会“Society5.0”とは
- ・児童一人一人のタブレット端末…文房具の1つ
- ・スマホ決済、マイナンバー、端末位置情報
- ・ChatGTP（AI生成）の台頭

2 子どもたちの情報モラル教育

- ・GIGA ワークブック（スタンダード）p.14~16「自分と相手とのちがい」体験
- ・ふくしま情報モラル診断（保護者向け）体験

3 家族でスマホルールを！

- ・メディアのトラブルについて
SNS といわれるアプリ、オンラインゲームのチャット機能
NINTENDO みまもり SWITCH や PlayStation で遊ぶ時間の設定
- ・子どもと話し合い、歩み寄ったルールの設定
GIGA ワークブック（スタンダード）p.106「インターネットにおけるコミュニケーションの特性」
- ・ネットやゲームをやる場所は？メディア端末を置く場所は？



使用する時間のルールは決めていたけど、使用場所については何も決めていなかったな。



他のおうちに比べて、子どもと使い方のルールとか全然話していなかった…。帰ったらすぐ確認しなきゃ！

2 校内授業研究会での実践

(1) 第3・4学年 学級活動(2)イ「自分と相手の感じ方のちがい」の実際

① 子どもの実態 ～情報に関するアンケートと学校生活の様子から～

学級の児童全員が家庭で自分もしくは家族の情報機器を使用しており、主にスマートフォンやタブレット、インターネットに接続できる家庭用ゲームが挙げられた。SNS等の利用は少なく、SNS等をきっかけに起きた事件やトラブルへの認知度は低い状況である。学校生活での友達との関わりについては「友達に嫌なことをしてしまったことがある」と思う児童は12名中7名おり、トラブルに発展した経験をもつ子どももいる。

② 授業の構想

子どもの実態から、児童は学校や家庭で情報機器を使用する機会はあるものの、SNS等を利用した経験のある児童は少なく、インターネットトラブルへの理解は低いことが分かった。そこで、普段の生活のコミュニケーションに着目し、「GIGA ワークブック」を活用することで同じ言葉や行動でも人によって感じ方が違うことに気付かせ、自分と相手との違いについて考えさせる必要があると考え、本時の題材を設定した。

③ 授業の実際

<本時のねらい>

- 同じ言葉でも、人によって感じ方が違う言葉があることに気づき、これからの生活で気を付けることを意思決定することができる。

学習活動・内容(概要)

- (1) 自分が嫌だと思える言葉についての学級の実態を捉え、本時のめあてをつかむ。
- (2) 「友達からされたら嫌な行動」カード教材を並べ、気付いたことを話し合う。
- (3) カード教材を基にどのようなトラブルが起きるか考える。
- (4) 学習を振り返り、実践へつなげる。



自分と相手との違いに気付かずに、
相手が嫌がることをしてしまったか
もしれないなあ。



自分と相手とは、同じ行動で
も感じ方に違いがあるね。

④ 事後研究会・ご指導を通して見えてきたこと

- さらに自分事としてとらえるための工夫⇒リスクの自覚が行動変容へとつながる。
 - ・ 嫌だなと思ったときの経験や感情をより詳しく共有した方がよい。
(ダイアログ的な対話)
 - ・ 経験の共有を生かし、トラブルが起きそうな場面を具体的に想像させる。

⑤ 指導助言 静岡大学教育学部学校教育講座 准教授 塩田 真吾 先生

- 情報モラル教育は、発達段階に応じて、**モラル教育（情報だけでなく）からリスク教育（主に情報に関する）**へと段階を経ながら進めていく。
- 「自分が嫌なこと」と「友達が嫌なこと」が同じではないことに気付く姿が多く見られた。
- リスクを想像できるかどうか。「絶対に大丈夫！」←トラブルに遭うシチュエーションを想像できていない。(例：SNSの炎上、オレオレ詐欺)
- 起きてしまいそうな場面を一人で、みんなで考えてみることで、リスクを見積もる力の育成につながっていく。

(2) 第6学年 社会科「江戸幕府と政治の安定」の実際

① 児童の実態 ～日々の様子と学習へ向かう姿勢から～

学級の児童全員が家庭で情報機器を使用しており、主にスマートフォンやタブレット、インターネットに接続できる家庭用ゲームが挙げられた。学級内では、主に授業内の調べ学習、朝の時間や休み時間でのタイピング練習で1人1台端末を使用している。また、家庭では自主学習の題材を探したり、自分の好きなものを調べたりするためにスマートフォンやタブレットを使用している。一方で、素早く検索をしようとして、検索結果の初めに出てくる項目の記事のみ見てまとめたり、調べ終えたりする様子が見られる。

② 授業の構想

児童の実態から、調べ学習をする際に、複数の情報を比較したり検討したりしようとする意識が低いことが分かった。そこで、「GIGA ワークブック」を活用し、収集した情報の整理や比較の仕方に着目し、より信頼性を高めて意見を伝え合えるようにした。次に、お互いの情報の共通点や相違点がそれぞれ妥当であるかどうかを検証することのできる態度や能力を育む必要があると考え、本時の単元を設定した。

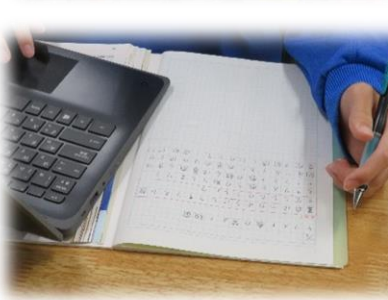
③ 授業の実際

<本時のねらい>

- キリスト教の禁止や鎖国について、その背景となった出来事や世の中への影響について、調べたり、話し合ったりしながら、幕府の政策の意図を考えることができる。

学習活動・内容（概要）

- (1) 江戸時代になるとキリスト教信者が急増していることを捉え、本時のめあてをつかむ。
- (2) 江戸幕府のキリスト教に対する取り締まりについて調べる。
- (3) 調べたことをもとに交流し、江戸幕府が禁止をした理由や影響について考える。
- (4) 本時の学習をまとめる。





- ④⑤⑥⑦の視点で
 ④…誰が発信しているのか。
 ⑤…いつ発信したのか。
 ⑥⑦…複数の情報で確かめたか。

<GIGA ワークブックより>



教科書に載ってないけど、**本当かな。**
信頼性は大丈夫かな。

④ 事後研究会・ご指導

- より信頼性のある情報を検索していくためには
 - ・ なぜ調べるのか
 - ・ どのように調べるのか（+なぜ教科書より広いことを調べる必要があるのか）を提示し、調べ学習の視点を明確にもたせる。

⑤ 指導助言 静岡大学教育学部学校教育講座 准教授 塩田 真吾 先生

- 教科での情報モラルに取り組み始めた点は、大きな成果。
- ICTを「使いこなす」ために…「使う」と「使いこなす」はどう違うのか。（例：文房具を「使う」、文房具を「使いこなす」）**使いこなす⇒目的や状況に合わせて、複数の選択肢の中からより最適なもの・方法を考えられること。**今回はタブレットだけだったが「教科書」「資料集」「タブレット」から選択して調べてもよかったのではないか。
- わざと誤情報を提示して、「これって本当なのかな」「どうして嘘だと言えるのかな」という視点を与えた学習展開も考えられる。

Ⅲ 成果と課題について

1 成果

- 家庭教育学級の中で教職員、保護者で話し合いながら演習を行ったことで、学校での指導と家庭での取組について、共通理解を図ることができた。また、子どものメディアの使い方に対する意識を高めることができた。
- 「情報モラル教育をどのように実施してよいか分からない」という教職員の声に対し、塩田先生からご講話いただいた内容やGIGAワークブックを教材として研究していくことで、発達段階や学習場面に応じた活用方法を教職員全体で考えることができた。

2 課題

- ICT機器を効果的に活用した情報モラルとメディアリテラシーの育成について、今後は高学年だけに留まることなく、発達段階や機器操作のスキルの面からも深く考えていきたい。
- 「授業を行って終わり」「本年度の研究で終わり」にすることなく、「発達段階に応じた指導」「学習活動の中で取り組める情報モラル」「メディアリテラシーの育成」について研究してきた視点を教育課程にも反映させていきたい。

【参考文献・引用文献・参考 URL】

- ・ 文部科学省（2017）。「小学校学習指導要領解説総則編」。
- ・ ふくしま情報モラル診断問題作成等委員会。「ふくしま情報モラル診断」。
<https://fukushima-infomoral.jp/general>（参照 2022-2-21）
- ・ 一般財団法人 LINE みらい財団。「GIGA ワークブック」。
<https://line-mirai.org/ja/>（参照 2022-2-21）